

木島平型小中一貫教育と授業づくり

～協同的な学びによって思考力を高めるときの新聞活用の仕方～

指定校1年次 木島平村立木島平中学校 小林 武男

◇はじめに

本校の学校教育目標は「心と体をひらいて学ぶ生徒」であり、目標を具現化するための中期目標を「実社会・実生活に生きる力をはぐくむ」として実践を重ねている。「実社会・実生活に生きる力」とは、「学んだことを生活で直面する問題を解決するときを活用させる力」のことである。そこで、学力を広く重層的にとらえ、その内容を「基本的生活力」「基礎・基本の力」「関係をつくる力」としている。

そして、「心と体をひらいて学ぶ生徒」は「学び合い」の積み重ねによって実現することから「実社会・実生活に生きる力」をはぐくむカリキュラムの中核には「協同的な学び」が据えられている。

「協同的な学び」とは、『聴く、問う』基盤とする言語活動により、課題について少人数で互恵的に学び合うことである。「聴く・問う」といった言語活動が活発におこなわれ協同的な学びが充実することにより、学びに参加している生徒の自己内対話が活発化し、新しい「気づき」が生まれる。新しい「気づき」を得ると、生徒は、対象との対話を深め、新たな見方、考え方を獲得していくだろう。

こうした本校の教育目標と、N I Eが考える「自律した考える人となる力を育てる」という目標、すなわち、「興味関心」「問題発見力」「読解力」「情報活用力」「探究力」「情報を批判的に見る力」「社会への提案力」等の能力を育成し、子どもたちが、これから生きていく社会で、主体的・合理的に判断し、行動して、より豊かな暮らしや社会を築いていくための力を育てるという目標が合致していると考えN I Eに参加した。

1. 研究の視点

本校は本年度より、木島平小学校とともに「木島平型小中一貫教育」の試行段階に入っている。学校教育目標を小中学校で共有し、義務教育9年間で「協同的な学び」でつなぐ内容となっている。

教育システムは、子どもの発達段階に合わせて9年間で4・3・2で構成している。

＊前期 小学1年～小学4年（人間としての基礎を培う課程）

＊中期 小学5年～中学1年（思考力を培う課程）

＊後期 中学2年～中学3年（自立の基礎を培う課程）

中学1年は中期の最終学年にあたり、友と協同したり、自己に問いかけたりしながら、ものごとの根拠を探る学びを確立する学年となる。2・3年生は、体験を通して発現する意志を見つめながら「志」を明らかにする、自らの生活を拓く学びを目指している。

1年生では「新聞スクラップ作品作り」、2・3年生では、「農村文明塾」という体験活動をまとめる「新聞作り」と「一流の生き方に学ぶ講演会」から社会とのつながりを表す「立志式の決意表明（2年生）」を総合的な学習の時間の中心題材としている。

そして、中学3年間の総合的な学習の時間で、「関係をつくる力」＝「意思決定力」と「かかわる力」をはぐくむことを目指している。

そこで、友との対話・対象との対話を重ねながら自己内対話が活発に行われる学習を通して、より充実した思考活動がなされる総合的な学習の時間を願い、新聞の特性を生かした学習活動を試みた。

新聞には最新の情報があり（速報性）、5W1Hなど詳しく解説されている。生徒が直接体験することができない社会の出来事に触れ、学習に対する興味・関心を高めたり、学んだことを実社会や実生活と結びつけて、より現実的にとらえたり、理解を深め発展させたりすることができる。

また、新聞は政治・経済・科学・文化から身近な生活に至るさまざまな分野の話題を見ることができる（一覧性）。さらに、一つの出来事を時系列で追ったり、多面的に見たりすることもできる（連続性）。そして、気になった記事を手軽に残しておくこともできる（保存性）。このような新聞の特性を生かし、総合的な学習の時間において、新聞から課題を探し、課題に関連する記事を収集し、整理・分析することにより、情報活用能力や思考力、表現力を高め、ものの見方や考え方を広げることができる。

協同的な学びと新聞の活用が、いろいろな立場から物事を見たり考えたりする思考力を養い、関係をつくる力を育てることができると考え、NIEの実践に取り組んだ。

2. 研究の内容

(1) NIE実践のテーマ

協同的な学びによって思考力を高めるときの新聞活用の仕方

(2) 新聞スクラップ作品づくりと協同的な学び

【題材設定の理由】

本校の生徒は、協同的な学びを重ね、少人数での意見交換が定着してきている。友との意見交換が、新しい発見や気づきにつながることを喜びに感じ、思考することを楽しむ姿がさまざまな授業で見ることができる。

反面、昨年までの生徒の課題の一つとして、情報を活用することが苦手であり、また情報を自分なりに理解し自分の考えを再構築していくことが不得手でもあった。

例えば、夏休みの課題として出される理科や社会科のレポートは、インターネットの情報を丸写しにしたり、著者の考えと自分の考えが混同したりしているものが目についた。また、社会事象への関心が低く、新聞やテレビニュースに接する時間が少ないため、文化祭で行われる意見文発表会でも、社会的話題を取り上げ自分の考えを主張する生徒が少ない。高校の前期選抜試験の質問内容として、生徒が最も頭を悩ますのが「最近気になったニュースを教えてください」というものである。ニュースの概要は説明できても自分の中でニュースの核心を理解し、自分の考えを再構築して語れないのである。

学び合いにより、このような課題が改善されつつある生徒に、社会と自分をつなぐ窓口として、新聞を使ってさまざまな思考活動を行うことは、社会への関心を高め、社会とのつながりを意識しながら自分の考えを持てるようになることが期待できる。

題材とした「新聞スクラップ作品作り」は、生徒自身が関心を持った社会事象について友と語り合うことで、より意欲的に主体的に思考を深める活動となるだろう。

「新聞スクラップ作品作り」の過程には、記事の内容を正確に読み取る、関心のある記事を収集する、集めた記事から自己課題を設定する、課題解決のために情報を整理・選定する、自分の考えが伝わるようにレイアウトする等さまざまな要素が含まれており思考活動の向上につながる。友と協同して「新聞スクラップ作品作り」に取り組むことによって、自己内対話が活発化すると共に、社会を見つめ自己の生き方を考えることを願い、本題材を設定した。

(3) 新聞スクラップづくりの学習過程

【学習目標】

- ①自分の課題に合った記事を集め、自分の考えや主張が伝わる作品を作り発信することができる。
- ②友の考えを受け止め、問い返し語り合うことを通して、新しい視点を持ったり、考えを深めたりすることができる。

【学習過程】

学習過程		学習活動	評価
核 心 を つ か む	ステップ1 新聞に親しむ	○新聞に目を向けよう 「斜面読み書きノート」を活用し、斜面を書き写し、感想を書くことにより、新聞に目を向ける習慣を身につけると共に、社会事象に関心を持つ。(対象との対話)	読解力 思考力
	ステップ2 新聞を読み、考える	○関心を持った記事を紹介しよう 読み深めてみたい記事を選び、記事に対する自分の考えをまとめ、友に内容を伝え、友と意見交換をすることで、新しい気づきを持つ。(対象との対話、友や教師との対話)	課題設定能力 読解力 思考力・判断力 表現力
文 脈 づ く り	ステップ3 新聞で自分の考えを持ち、表現する	○新聞スクラップ作品を作ろう 関心を持った記事を収集し、読み深めたいテーマを持ち、自分の伝えたい思いを表現したスクラップ作品を作る。(対象との対話、友や教師との対話)	課題設定能力 情報活用能力 思考力・判断力 表現力
	ステップ4 新聞で自分の考えを発信する	○スクラップ作品に込めた考えを伝えよう 作品を通して伝えたい自分の考えを、友に説明すると共に、友の疑問や考えを聞き、意見交換を通して、新たな見方を発見する。(友や教師との対話、自己との対話)	表現力 思考力・判断力

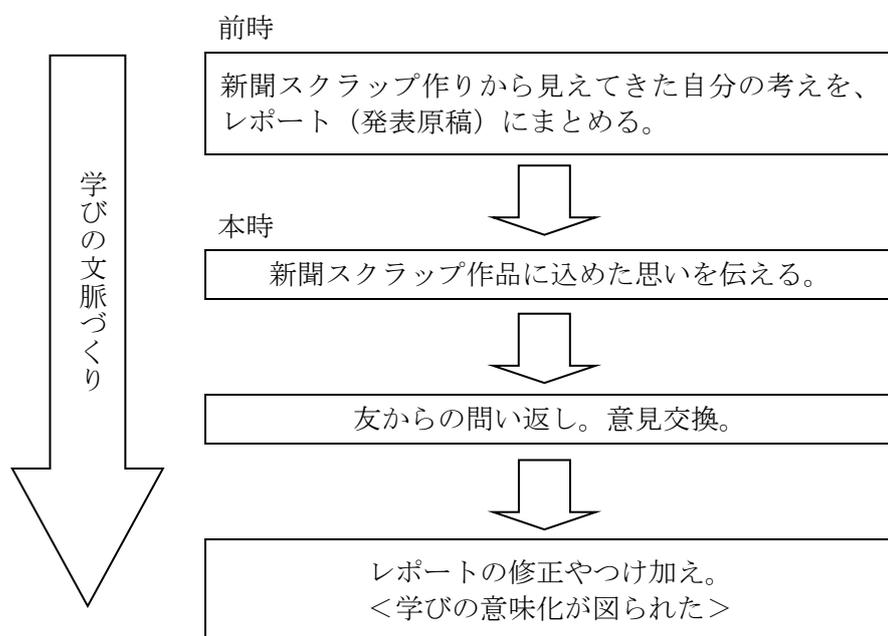
(4) 学びの意味化を図る評価活動

新聞記事と出合った生徒は、まず、対象と対話を始める。そこでは、既存の知識を総動員して対象を理解しようとする。そして、対象に対する自分なりの見方や考え方を明らかにする。

さらに、自分の考えを友に伝え、友との対話が始まる。友との対話が活発に行われると「新しい気づき、視点」を得ることができ、対象とより深く対話を始めようとする。

すなわち、学んだことの意味や価値を自分なりの言葉で表そうとすると、対象との対話を深めるので、獲得した新たな見方、考え方が明らかになる。

新聞スクラップ作品に込めた思いを伝える学習場面では、発表を聞いた友から考えを伝えてもらうことで、「新しい気づき、視点」を持つことができる自己評価活動を位置づけることが重要となる。



総合的な学習の時間学習指導案

- 1 日 時 平成 24 年 10 月 23 日 (火) 13 : 35 ~ 14 : 25
- 2 授業学級 1 年 1 組 男子 10 名 女子 10 名 計 20 名
- 3 助言者 信濃毎日新聞社 N I E アドバイザー 江澤 啓二 先生
- 4 授業者 教諭 小林 武男
- 5 授業デザイン (本時案)

(1) 本時で活用される知識・技能

- ・情報を整理し筋道立てて、わかりやすく伝える。
- ・得た情報から、自分の考えをまとめる。

(2) 協同的な学びを成立させるための配慮

- ・発表に対して単に質問するのではなく、内容に対する自分の理解や考えを問い返すことで追究を深めさせる。
- ・発表者が、意見交換を振り返れるよう、意見は付箋に書かせ、作品に貼り付けさせる。

(3) 授業展開

①単元の核心

対象との対話を通して見出した、友に伝えたい一人ひとりのテーマ

②ねらい

新聞スクラップ作品をグループで発表する場面で、聞き手が発表者の作品に込められた願いを理解し、それに対する問い返しをしながら意見交換することを通して発表者が新しい気づきや視点を持つことができる。

③授業の構想

・学習問題

筋道を立てて、わかりやすく作品に込めた思いを伝えよう。

- ・発表の手順を確認する。(メモ等は取らず、発表を聞くことに集中する。発表に対する自分の気づきや考えは、問い返し用の付箋に 1 項目 1 枚で書く。)

・学習課題

友の考えを聴き、自分の気づきや考えを伝えよう。

- ・問い返し用の付箋を、作品に貼り付けながら、どんな点に対してどんな考えを持ったのかを伝え、意見交換する。
- ・グループ内の発表が終わったら、自分のレポート (発表原稿) に新しい気づきや考え方を赤で書き加える。

6 学び合いの姿から

作品テーマ「いじめ～このままじゃいけない～」で、作品に込めた思いを発表したRさん。発表後のグループによる語り合いの場面から

-----発表の結論部分-----

R生「自分もいじめがあったら、しっかり伝えていきたい。いじめられている人を見たら
勇気を持って先生たちに伝えようと思います。」

-----語り合いスタート-----

K生「大津の事件では、なぜいじめを公表しなかったのかな。」

H生「ばれたら学校が困るからだよ。」

J生「それって、大人たちの都合なの。」

R生「当時は、いじめに対する意識が低かったんじゃないかな。」

K生「かわいそうだよ。いやだよ。」

Y生「自分もいじめをテーマに作品をまとめたんだ。その記事の中で、自分からSOSを出すことが、いじめをなくすために大事だとわかった。だから、自分たちがいじめに対して行動することが大事なんだと思う。」

H生「親でも、友達でもだれか話せる人に伝えるのは大切だと思う。」

R生「でも、いじめられている人は、いじめのせいで友達がいないかもしれない。そういう場合はどうしたらいいの。」

Y生「だれかだれかいると思う」

H生「クラスで話し合うとか、生活ノートに書くとかそういうこともできると思う。」

(続く)

(考察)

R生は、作品を通していじめの不当性といじめに直面したとき、どう行動すべきかを中心に説明し、その視点で語り合いが深まることを願っていた。

しかし、語り合いの当初は、作品からはなれた発言が多かった。そこで「いじめに対する意識」という視点を提示した。

すると、Y生が「自分の作品を基に、いじめられている人の意識」という視点で、意見を述べてくれた。R生が願う核心に近づくきっかけとなる発言である。R生は、自分の作品の中では触れなかった視点を持つことができた瞬間である。

そこで「でも、いじめられている人は…」という新たな疑問を友に投げかけ、より深い追究を始められたのである。

学習の振り返りでは、「話し合いを通して、いじめを受けたとき、それを伝えることが事件を大きくしない大切なことだとわかった。でも、伝えることが難しいこともあるので、まわりの力もやっぱり大事。一人きりでは解決できないので、みんなの力が必要だと思った。」と書いた。

Y生の「自分もいじめを…」という発言は、「かかわる力」の高まりの表れであり、R生の振り返りの記述は、「意思決定力」の高まりの表れであるととらえられる。そして、

この語り合いの場面では、自己内対話（思考力を高める対話）が盛んにおこなわれていたことが窺える。

グループによる語り合いが、新しい視点や考え方をもち、自分の学びが実感できた場面と考える。

7 まとめにかえて

「新聞スクラップ作品をつくろう」の実践から、本校の「協同的な学び」によって、総合的な学習の時間の目標である「関係をつくる力」＝「意思決定力」と「かかわる力」に高まりが見られた。

社会と自分をつなぐ新聞という対象との対話を通して、自分の考えを構築しスクラップ作品という形にし、友に発信する。そして、友との対話を通して、新しい考え方やものの見方に出会い、さらに深く対象と対話し社会とのつながりを実感する。総合的な学習の時間でのNIE実践で見られた学びの姿は、木島平型小中一貫教育の中期のまとめとなる中学1年生の思考力を培う課程を具現化した一つの姿であろう。

今後の課題は、生徒が自己の高まりをより自覚し、学んだことの価値を自分のことばで整理できるまで高めること、つまり「学びの意味化」を、新聞を活用した総合的な学習の時間の中で、しっかり図っていくことである。「新聞スクラップ作品が完成した」「筋道を立てて説明できた」等、具体的経験による達成感や満足感でよしとせず、より深い思考活動を実感させていきたい。

